

幼児の愛着タイプ評定項目作成の試み

○粕谷貴志 昆保典 六本木郁子 安藤拓也
(専修大学北上福祉教育専門学校)

<問題と目的>

愛着とは、Bowlby(1969)が提唱した概念で、親と子の間など、特別な対象と子との間に形成される緊密な情緒的絆を意味する。幼児の愛着の質は、ストレンジ・シチュエーション法を用いて、①回避型、②安定型、③抵抗・アンビバレント型の3つのタイプに分類されている(Ainsworth et al., 1978)。その後の研究では、幼児期の愛着の質に連続性がみとめられ、その後の対人関係、思いやり行動、攻撃性、社会適応などに関連があることが示唆されている(Kestenbaum et al., 1989, LaFreniere & Sroufe, 1985, Sroufe et al., 1990 など)。

早期の特定の対象との愛着の質とその後の社会情緒的発達については、特定の対象(母親など)との愛着の質によって表象モデルを形成し、それが内的作業モデルとして内在化され、その後の社会情緒的発達に決定的な影響を持つという考え方がある。しかし、一方では経験する複数の愛着対象との関係それぞれに内的作業モデルが形成され、いずれかの内的作業モデルが安定していれば、その後の社会情緒的成達は全般的に円滑に進行するという考え方(Leiderman, 1989)もあり、一定したとらえ方はなされていない。後者の考え方によれば、母親などの養育者以外の他者(保育者など)が子どもとの情緒的絆をもつことの重要性が示されている。保育者が子どもの愛着タイプを把握する視点を持ち子ども理解を深めて情緒的な絆をもつことにより、有効な発達への援助ができる可能性があると考えられる。

本研究では、先行研究で指摘されている愛着タイプ別の幼児の行動特性や幼児の保育園での行動特性の記述(Sroufe et al., 1983)をもとに、保育者が園児の愛着タイプを把握するための行動評定項目を作成することを目的とした。

<方法>

評定項目の作成：愛着タイプ別の保育園での行動特性を記述した先行研究(Sroufe et al., 1983)などをもとに、①回避型、②安定型、③抵抗・アンビバレント型の3タイプの幼児の行動に関する行動評定項目をそれぞれ6項目、計18項目作成した。評定は「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」の

5件法とした。

調査対象：A県内のB幼稚園児、3歳児クラスから5歳児クラスの172人であった。

調査時期：2002年7月。

手続き：調査対象となった幼稚園児の担任の先生に、行動評定の調査用紙を配布し、担任する園児について一人ひとりを評定してもらった。調査は、実際の園児の行動を観察しながらおこなう方法でなく、一人ひとりの園児の行動を教師がどのようにとらえているかを答えてもらう形でおこなった。

<結果>

因子分析結果 調査結果を集計して主因子法により因子分析をおこなった。共通性が0.4以下の項目を除外し、14項目で再度分析をおこなった結果、解釈可能な2因子が見出された。第一因子は、「保育者との接触を求めるが、ひとたび保育者が接近すると逆に拒否的な態度を示したりする」や「わざと困らせるなど、あまり効果的でないやり方で保育者の注意を引こうとする」、「保育者の助けが必要なときも、屈折した形で助けを求めることがある」などの7項目で「非安定型因子」と解釈された。第二因子は、「必要に応じて保育者を頼りにしながら、安定して自分の活動を展開する」や「自分が必要なときは保育者にためらいなく素直に援助を求める」、「保育者との親密な関係を持つが、友達との遊びや周りの探索をする活動が多い」などの7項目で「安定型因子」と解釈された。信頼性係数(クロンバックの α 係数)は、非安定型項目が $\alpha=0.87$ 、安定型項目が $\alpha=0.80$ であった。この結果では、2因子構造であると考えられ、愛着のタイプとして指摘されている「回避」、「抵抗・アンビバレント」の因子は見出されなかったが、第一因子「非安定型因子」のなかに、「回避」と「抵抗・アンビバレント」因子が未分化のまま含まれていると考えられた。

男女差、年齢差の検討 安定型項目および非安定型項目の評定得点の合計をそれぞれ安定型得点および非安定型得点とし、得点平均の男女間、クラス年齢間で分散分析をおこなった。その結果、安定型得点平均については、男女間、クラス年齢間で有意差はみられなかった。非安定型得点については、男女間

およびクラス年齢間ともに有意差がみられた (Table 1.2)。

Table 1 男女別の安定型得点と非安定型得点の平均と分散分析の結果

	男	女	分散分析結果
安定型得点	28.16(3.71)	28.07(4.19)	$F=0.02$ n.s.
非安定型得点	15.16(6.32)	13.27(4.68)	$F=4.92$ * 男>女
()内は標準偏差			*: $p<.05$ **: $p<.01$

Table 2 クラス年齢別の安定型得点と非安定型得点の平均と分散分析の結果

	3 歳児クラス	4 歳児クラス	5 歳児クラス	分散分析結果
安定型得点	27.68(2.63)	28.48(3.89)	27.99(4.59)	$F=0.55$ n.s.
非安定型得点	17.21(4.86)	13.97(5.69)	12.80(5.48)	$F=8.04$ ** 3 歳児>4 歳児・5 歳児
()内は標準偏差				*: $p<.05$ **: $p<.01$

思いやり行動・攻撃性行動との関連 評定された幼児の愛着タイプと幼児の園での行動とのかかわりを検討するために、保育者に評価による幼児の思いやり行動評定と攻撃性行動評定を依頼し、幼児の愛着タイプとの関連を調べた。

思いやり行動評定尺度 :「泣いている子を慰める」「わからなくて困っている子がいたら教えてあげる」「仲間に入れない子がいたらさそってあげる」など 12 項目の行動評定を作成し、保育者に評定してもらった。因子分析の結果、単因子構造であると考えられ、共通性の低い 1 項目を除いて、11 項目($\alpha=0.92$)の評定得点合計を思いやり行動得点とした。クラス年齢間で平均に有意差が見られた。男女間では有意差はみられなかった。

攻撃性評定尺度 :「けんかして友達をたたく」「友達を泣かせる」「腹を立ててひどいことを言う」など 12 項目の行動評定を作成し、保育者に評定してもらった。因子分析の結果、単因子構造であると考えられ、共通性の低い 1 項目を除いて、11 項目($\alpha=0.96$)の評定得点合計を攻撃性得点とした。男女間、クラス年齢間ともに平均に有意差がみられた。

愛着タイプの特徴と思いやり行動および攻撃性との関連を検討するために、愛着の安定型得点および非安定型得点と思いやり行動得点および攻撃性得点との相関を求めた。

その結果、思いやり行動得点については安定型得点との間に、4 歳児男子において有意に中程度の正の相関がみられた。また、非安定型得点との間に、4 歳児の男子と 5 歳児において、有意に弱い～中程

度の負の相関がみられた (Table 3)。

Table 3 クラス年齢別、男女別の安定型得点、非安定型得点と思いやり行動得点との相関係数

			思いやり行動得点
4 歳児クラス	男子 n=42	安定型得点	0.455**
		非安定型得点	-0.323*
	女子 n=27	安定型得点	0.275 n.s.
		非安定型得点	-0.238 n.s.
5 歳児クラス	男子 n=29	安定型得点	0.280 n.s.
		非安定型得点	-0.408*
	女子 n=36	安定型得点	0.216 n.s.
		非安定型得点	-0.500**
			*: $p < .05$ **: $p < .01$

*3 歳児においてはサンプル数が少ないため分析から省いた。

攻撃性得点については、安定型得点との間に 4 歳児女子と 5 歳児男子において、有意に中程度の正の相関がみられた。また、非安定型得点との間に 4・5 歳児男女全てにおいて有意に中程度の相関がみられた (Table 4)。

Table 4 クラス年齢別、男女別の安定型得点、非安定型得点と攻撃性得点との相関係数

			攻撃性得点
4 歳児クラス	男子 n=42	安定型得点	0.171 n.s.
		非安定型得点	0.665**
	女子 n=27	安定型得点	0.406*
		非安定型得点	0.280 n.s.
5 歳児クラス	男子 n=29	安定型得点	0.464*
		非安定型得点	0.514**
	女子 n=36	安定型得点	0.221 n.s.
		非安定型得点	0.685**
			*: $p < .05$ **: $p < .01$

*3 歳児においてはサンプル数が少ないため分析から省いた。

<まとめと考察>

本研究では、現場で保育者が愛着タイプの視点から幼児理解をすすめるための評定項目の作成を試みた。安定型と非安定型の 2 つの因子が見出され、それらの因子と思いやり行動、攻撃性行動との関連が示唆される結果が得られた。園で攻撃性を発揮するなど保育者を困らせる行動をとる幼児の内面の理解をたすける視点としてこの評定項目が役立つ可能性があると考えられる。しかし、それぞれの年齢の幼児を同じ項目で評定することの問題や、今回作成した項目による評定が幼児の愛着のタイプを把握することになっているかなど検討すべき課題が残る。サンプル数と観察事例を増やして妥当性を検討していかなければならない。